

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ  
 信者父聖神共始

なきことばわがすくいのためえに  
 言吾救の爲

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて  
 童貞女生者讃歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて  
 拜彼甘其身

じゅうじかにのぼおりしをしのびそのこ  
 十字架上死忍其光

うえいのふくかつにてしせしものを  
 榮復活死者

ふくかつせしめたまあえばなあり。  
 復活給

【 正教の主日のトロパリ 第2調 】

じんじなるハリストスカみよ、われらなんぢのし  
 仁慈神我等爾至

じょうなるせいぞうにふくはいして、わがしょざ  
 淨聖像伏拜我諸罪

いのゆるしをもとおむ、けだしなんぢ  
 赦求蓋爾

は その つく り し も の を て き の ど れ い よ り す く  
 其 造 者 を 敵 奴 隷 よ り 救  
 わん た め に 、 あ ま ん じ て み に て じ ゅ う じ か に の ぼ り  
 爲 甘 身 十 字 架 升  
 た ま え り 。 ゆ え に わ れ ら か ん しゃ し て な ん ぢ  
 給 故 我 等 感 謝 爾  
 に よ ぶ 、 せ か い を す く わん た め に き た り し  
 呼 世 界 救 爲 來  
 わ が き ゅ う せ い し ゅ よ 、 な ん ぢ は し ゅ う じ ん を  
 我 救 世 主 爾 衆 人  
 よ ろ こ び に み て た ま え り 。  
 欣 喜 満 給

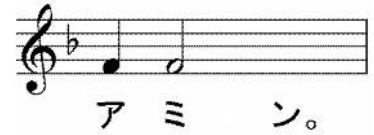
【 正教の主日のコンダク 第2調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 何 時 世 世  
 し ゅ う し ん ぢ よ よ 、 か ぎ ら れ ん ち ち の こ と ば は  
 生 神 女 限 父 言  
 な ん ぢ よ り み を と り て お の れ を か ぎ い り 、  
 爾 身 取 己 限

けがされたるぞうをしんせいなるびれいにあ  
 汚 像 神聖 美麗 合  
 わせて、いにしへのさまにかえしたま  
 古 状 復 給  
 えり。われらはすくいをうけとめて、  
 我 等 救 承 認  
 おこないとことばをもってこれをあらわあ  
 行 言 以 之 顯  
 す。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主幸よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神、聖 勇  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、 )

【 提綱 (プロキメン) 大齋第一主日第4調 諸祖の歌 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主、我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世々に讃美讃榮せら  
 る、

しゅ わがせんぞのかみよ、なんぢはさんよう  
 主 我 先 祖 神 爾 讃 揚  
 せられ、なんぢのなはよよにさんびさんよ うせ  
 爾 名 世 世 讃 美 讃 揚  
 られん。

誦經) 蓋爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり、

しゅ わ が せ んぞ の か み よ 、 なんぢ は さんよう  
 主 我 先 祖 神 爾 讚 揚  
 せ ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんよ う せ  
 爾 名 世 世 讚 美 讚 揚  
 ら れ ん。

誦經) <sup>しゅ わ せんぞ かみ なんぢ さんよう</sup> 主、我が先祖の神よ、爾は讚揚せられ、

なんぢ の な は よ よ に さんびさんよ う せ ら れ ん。  
 爾 名 世 世 讚 美 讚 揚

【 使徒經 (アポストロス) 329 半端 エウレイ書 11 章 24 節~26、32~12 章 2 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい しん よ ちょう およ むすめ こ と な いな</sup> 兄弟よ、信に由りてモイセイは長ずるに及びて、ファラオンの女の子と稱えられるを辭

<sup>ざんじ ざいあく たのしみ う むしろかみ たみ とも くる ねが</sup> みて、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、寧神の民と共に苦しまんことを願ひ、ハリ

<sup>よ そしり たから さら おおい とみ おも けだしかれ むくい</sup> ストスに縁る誹毀を、エギプトの寶よりも更に大なる富なりと意えり、蓋彼は賞を

<sup>あお のぞ われまたなに い も</sup> 仰ぎ望めり。我復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムプソン、イエツファイ、ダヴ

<sup>およ た よげんしゃ こと の われ ときた かれら しん よ</sup> イド、サムイル、及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由り

<sup>しょこく したが ぎ おこな きやく う しし くち ふさ ひ いきおい け つるぎ は</sup> て諸國を従え、義を行ひ、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を

<sup>さ よわ つよ たたかい いさ いほう ぐん ついや おんな そのししゃ ふく</sup> 避け、弱きよりして強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復

<sup>かつ もの う またあるもの さら よ ふくかつ え ため まぬが ほつ むご</sup> 活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るるを欲せずして、酷

<sup>ころ た もの あざけり むち またなわめ ひとや ころみ う いし う</sup> く戮されたり、他の者は嘲弄と鞭扑と、又縲紲と囹圄との試を受け、石にて撃たれ、

のこぎり ひ ごうもん あ やいば ころ めんよう さんよう かわ き るろう  
 鋸にて解かれ、拷問に遇わせられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離し、  
 きゆうぼう かんなん しんく しの せかい お た もの こうや さんれい がんけつ ちくつ  
 窮乏、患難、辛苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に  
 さまよ これらみなしん よ しょう きよやく ところ え けだしかみ  
 徨えり、此等皆信に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、蓋神は  
 われら こと おい さら よ こと よけん かれら われら とも まつた え  
 我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん  
 ため ゆえ われら しょうしゃ か くも ごと おお かも およそ おもに われら はば つみ  
 爲なり。故に我等も證者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻む罪  
 さ にんたい もつ われら まえ あ はせば はし われら しん かしら およ せいぜんしゃ  
 とを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、我等の信の首、及び成全者  
 イスを仰ぎ望むべし。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪  
 のはかない歡樂にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受ける  
 そしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。このほか、  
 何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて  
 語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のもの  
 を受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者  
 となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更  
 にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なお  
 ほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、  
 石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きま  
 わり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中  
 と岩の穴と土の穴とを、さまよひ続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、  
 約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっている  
 ので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。こういうわけで、わたしたちは、こ  
 のような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをか  
 なぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であ  
 り、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

\*\*\*\*\*

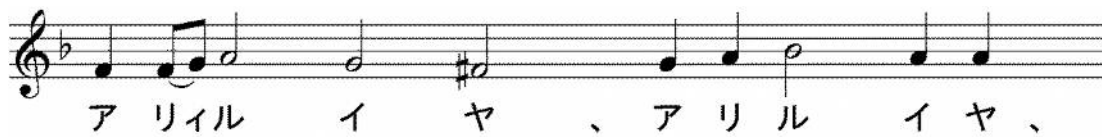
【 アリルイヤ 第8調 】

司祭) 爾に平安、

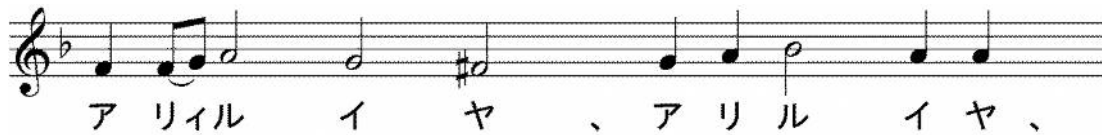
誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

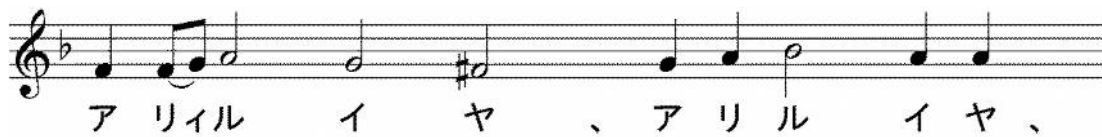
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しさい</sup> 司祭 <sup>うち</sup> の中に <sup>およ</sup> モイセイ 及び <sup>かれ</sup> アアロン <sup>な</sup> あり、 <sup>よ</sup> 彼の名 <sup>もの</sup> を呼ぶ者 <sup>うち</sup> の中にサムイルあり、



誦經) <sup>かれらしゅ</sup> 彼等 <sup>よ</sup> 主に <sup>しゅこれ</sup> 呼びしに、 <sup>き</sup> 主之に <sup>き</sup> 聴けり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup> 人を <sup>あい</sup> 愛する <sup>しゅさい</sup> 主宰 <sup>わ</sup> よ、 <sup>こころ</sup> 我が心 <sup>かみ</sup> に神 <sup>し</sup> を知る <sup>ちえ</sup> 智慧 <sup>いさぎよ</sup> の <sup>ひかり</sup> 淨き <sup>かがや</sup> 光 <sup>わ</sup> を輝 <sup>しねん</sup> かし、 <sup>わ</sup> 我が <sup>しねん</sup> 思念

<sup>め</sup> の目 <sup>ひら</sup> を啓 <sup>なんぢ</sup> きて、 <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ふくいん</sup> が福音 <sup>おしえ</sup> の教 <sup>さと</sup> を悟 <sup>たまえ</sup> らしめ <sup>わ</sup> 給 <sup>うち</sup> え、 <sup>なんぢ</sup> 我が <sup>なんぢ</sup> 衷 <sup>ふく</sup> に <sup>い</sup> 爾 <sup>いましめ</sup> の福 <sup>い</sup> たる <sup>い</sup> 誠 <sup>い</sup> を

<sup>おそ</sup> 畏 <sup>おそれ</sup> る <sup>い</sup> 畏 <sup>われら</sup> をも <sup>ことごと</sup> 入 <sup>にくたい</sup> れて、 <sup>よく</sup> 我等 <sup>ふ</sup> が <sup>およ</sup> 悉 <sup>なんぢ</sup> くの <sup>よるこ</sup> 肉體 <sup>ところ</sup> の慾 <sup>よるこ</sup> を踏 <sup>よるこ</sup> み、 <sup>よるこ</sup> 凡 <sup>よるこ</sup> そ <sup>よるこ</sup> 爾 <sup>よるこ</sup> の喜 <sup>よるこ</sup> ぶ <sup>よるこ</sup> 所 <sup>よるこ</sup>

<sup>おも</sup> を思 <sup>か</sup> い <sup>おこな</sup> 且 <sup>ぞくしん</sup> つ <sup>せいかつ</sup> 行 <sup>す</sup> いて、 <sup>いた</sup> 屬 <sup>たま</sup> 神 <sup>けだし</sup> の生 <sup>かみ</sup> 活 <sup>かみ</sup> を過 <sup>かみ</sup> ぐる <sup>かみ</sup> を致 <sup>かみ</sup> させ <sup>かみ</sup> 給 <sup>かみ</sup> え、 <sup>かみ</sup> 蓋 <sup>かみ</sup> ハ <sup>かみ</sup> リ <sup>かみ</sup> ス <sup>かみ</sup> ト <sup>かみ</sup> ス <sup>かみ</sup> 神 <sup>かみ</sup> よ、

<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>わ</sup> は <sup>たましい</sup> 我が <sup>からだ</sup> 靈 <sup>こうしょう</sup> と <sup>われらなんぢ</sup> 體 <sup>なんぢ</sup> との <sup>むげん</sup> 光 <sup>ちち</sup> 照 <sup>しせいしぜん</sup> なり、 <sup>しせいしぜん</sup> 我等 <sup>しせいしぜん</sup> 爾 <sup>しせいしぜん</sup> と <sup>しせいしぜん</sup> 爾 <sup>しせいしぜん</sup> の無 <sup>しせいしぜん</sup> 原 <sup>しせいしぜん</sup> の父 <sup>しせいしぜん</sup> と <sup>しせいしぜん</sup> 至 <sup>しせいしぜん</sup> 聖 <sup>しせいしぜん</sup> 至 <sup>しせいしぜん</sup> 善 <sup>しせいしぜん</sup> に <sup>しせいしぜん</sup> し

<sup>いのち</sup> て <sup>ほどこ</sup> 生命 <sup>なんぢ</sup> を <sup>しん</sup> 施 <sup>こうえい</sup> す <sup>けん</sup> 爾 <sup>いま</sup> の <sup>いつ</sup> 神 <sup>よよ</sup> と <sup>よよ</sup> に <sup>よよ</sup> 光 <sup>よよ</sup> 榮 <sup>よよ</sup> を <sup>よよ</sup> 獻 <sup>よよ</sup> ず、 <sup>よよ</sup> 今 <sup>よよ</sup> も <sup>よよ</sup> 何 <sup>よよ</sup> 時 <sup>よよ</sup> も <sup>よよ</sup> 世 <sup>よよ</sup> 世 <sup>よよ</sup> に、 <sup>よよ</sup> ア <sup>よよ</sup> ミ <sup>よよ</sup> ン。 )

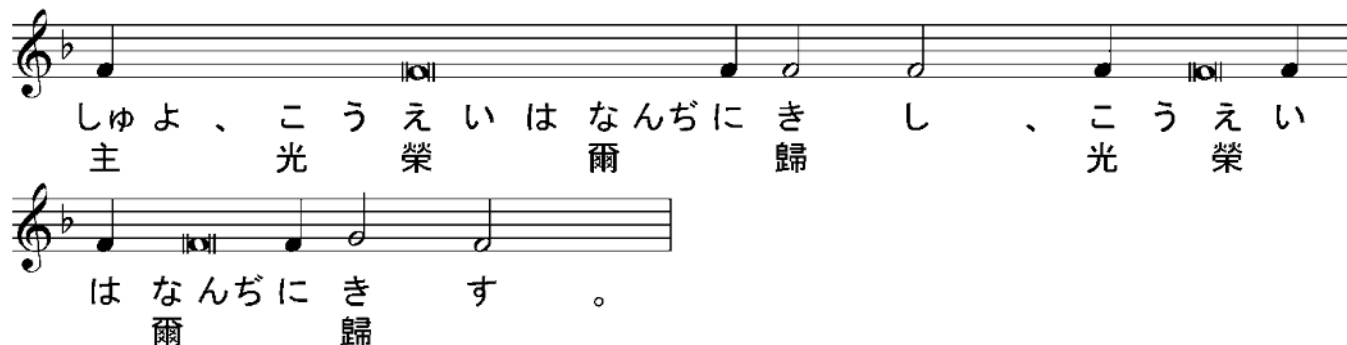
【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書5 端 1 章 43~51 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿 <sup>つつし</sup> 智、 <sup>た</sup> 肅 <sup>せいふくいんけい</sup> み <sup>き</sup> て <sup>しゅうじん</sup> 立 <sup>へいあん</sup> て <sup>へいあん</sup> 聖 <sup>へいあん</sup> 福 <sup>へいあん</sup> 音 <sup>へいあん</sup> 經 <sup>へいあん</sup> を <sup>へいあん</sup> 聴 <sup>へいあん</sup> く <sup>へいあん</sup> べ <sup>へいあん</sup> し、 <sup>へいあん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人 <sup>へいあん</sup> に <sup>へいあん</sup> 平 <sup>へいあん</sup> 安、





司祭) イオアン<sup>でん</sup>傳<sup>せいふくいんけい</sup>の聖<sup>よみ</sup>福音經の讀、



司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし。彼の<sup>か</sup>時<sup>とき</sup>イイスス、ガリラヤに往<sup>ゆ</sup>かんと欲<sup>ほつ</sup>し、フィリップに<sup>あ</sup>遇<sup>これ</sup>いて、之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、我<sup>われ</sup>に從<sup>したが</sup>え。フィリップはヴィフサイダの<sup>ひと</sup>人<sup>およ</sup>にして、アンドレイ及<sup>ま</sup>びペトルと<sup>おな</sup>邑<sup>おな</sup>を同じくせり。フィリップはナファナイルに<sup>あ</sup>遇<sup>これ</sup>いて、之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>う、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は、モイセイが<sup>そのりつぼう</sup>其<sup>およ</sup>律<sup>およ</sup>法<sup>およ</sup>に、及<sup>およ</sup>び諸<sup>しよ</sup>預<sup>よげん</sup>言<sup>しや</sup>者<sup>しる</sup>が記<sup>ところ</sup>しし<sup>もの</sup>所<sup>あ</sup>の者<sup>こ</sup>に<sup>ひと</sup>遇<sup>ひと</sup>えり、是<sup>こ</sup>れ<sup>ひと</sup>イオシフの子<sup>ひと</sup>、ナザレトの<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>、イイススなり。ナファナイル<sup>これ</sup>之<sup>い</sup>に<sup>あ</sup>謂<sup>よ</sup>えり、豈<sup>い</sup>ナザレトより<sup>よ</sup>善<sup>もの</sup>き者<sup>い</sup>の出<sup>い</sup>づる<sup>いわ</sup>あらんや。フィリップ曰<sup>きた</sup>く、來<sup>み</sup>りて觀<sup>み</sup>よ。イイススはナファナイルの<sup>おのれ</sup>己<sup>きた</sup>に<sup>み</sup>來<sup>か</sup>たる<sup>き</sup>を<sup>い</sup>觀<sup>み</sup>て、彼<sup>い</sup>を<sup>み</sup>指<sup>ま</sup>して<sup>こと</sup>曰<sup>こと</sup>く、視<sup>い</sup>よ、誠<sup>ま</sup>に<sup>こと</sup>イスラ<sup>こと</sup>イリ<sup>こと</sup>人<sup>こと</sup>にして、詭<sup>こと</sup>譎<sup>こと</sup>なき<sup>こと</sup>者<sup>こと</sup>なり。ナファナイル彼<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>謂<sup>こと</sup>う、爾<sup>こと</sup>何<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>由<sup>こと</sup>りて<sup>こと</sup>我<sup>こと</sup>を<sup>こと</sup>知<sup>こと</sup>れる<sup>こと</sup>か。イイスス答<sup>こと</sup>えて<sup>こと</sup>曰<sup>こと</sup>えり、フィリップが<sup>こと</sup>未<sup>こと</sup>だ<sup>こと</sup>爾<sup>こと</sup>を<sup>こと</sup>呼<sup>こと</sup>ば<sup>こと</sup>ざる<sup>こと</sup>先<sup>こと</sup>、爾<sup>こと</sup>が<sup>こと</sup>無<sup>こと</sup>花<sup>こと</sup>果<sup>こと</sup>樹<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>下<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>在<sup>こと</sup>る<sup>こと</sup>時<sup>こと</sup>、我<sup>こと</sup>爾<sup>こと</sup>を<sup>こと</sup>見<sup>こと</sup>たり。ナファナイル答<sup>こと</sup>えて<sup>こと</sup>彼<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>謂<sup>こと</sup>う、夫<sup>こと</sup>子<sup>こと</sup>、爾<sup>こと</sup>は<sup>こと</sup>神<sup>こと</sup>の子<sup>こと</sup>、爾<sup>こと</sup>は<sup>こと</sup>イスラ<sup>こと</sup>イリ<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>王<sup>こと</sup>なり。イイスス答<sup>こと</sup>えて<sup>こと</sup>曰<sup>こと</sup>えり、我<sup>こと</sup>が<sup>こと</sup>爾<sup>こと</sup>を<sup>こと</sup>無<sup>こと</sup>花<sup>こと</sup>果<sup>こと</sup>樹<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>下<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>見<sup>こと</sup>たりと<sup>こと</sup>言<sup>こと</sup>い<sup>こと</sup>しに<sup>こと</sup>因<sup>こと</sup>りて、爾<sup>こと</sup>信<sup>こと</sup>ず、爾<sup>こと</sup>此<sup>こと</sup>より<sup>こと</sup>も<sup>こと</sup>大<sup>こと</sup>なる<sup>こと</sup>事<sup>こと</sup>を見<sup>こと</sup>ん。又<sup>こと</sup>彼<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>謂<sup>こと</sup>う、我<sup>こと</sup>誠<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>誠<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>爾<sup>こと</sup>等<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>語<sup>こと</sup>ぐ、是<sup>こと</sup>より<sup>こと</sup>爾<sup>こと</sup>等<sup>こと</sup>は<sup>こと</sup>天<sup>こと</sup>開<sup>こと</sup>けて、神<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>使<sup>こと</sup>等<sup>こと</sup>が<sup>こと</sup>人<sup>こと</sup>の子<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>上<sup>こと</sup>に<sup>こと</sup>陟<sup>こと</sup>降<sup>こと</sup>する<sup>こと</sup>を見<sup>こと</sup>ん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従ってきなさい」。ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にするしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。イエスはナタナエルが自分の方に來

るのを見て、彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りが無い」。ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見た、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。また言われた、「よくよくあなたがたに言う。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ へ